



神保憲朗さん 近影

神保憲朗さんと初めて会ったのは、今年9月の小田原・下支部懇親会の時でした。神保先輩の隣の席になったのは全くの偶然でしたが、隣に座ったおかげで言葉を交わす機会が必然的に多くなりました。頻りに酒をすすられるので、あまり酒が強くない私は閉口しましたが、神保さんが昭和22年神師卒と知りその元気なのと、年齢を少しも感じさせない話ぶりに感心しました。そこで今回お願いして、敗戦前後の師範学校の生活や、戦後間もなく六三制発足の頃のお話を伺う事にしました。以下が、その時に伺った話です。

蜜柑と梅の曾我の里で

戦中・戦後を生きた89年

語り手 神保^{のりお}憲朗（昭和22年神師卒）

聞き手 黒川鈴谷（昭和35年国大卒）



黒川 先生は今でも蜜柑山などで農作業をなさっているそうで、お忙しい中をお出で頂きましてありがとうございます。さっそくお尋ねしますが、神保先生は小田原のお生まれですか。

神保 そうです。私の生家は曾我梅林で有名な小田原市曾我谷津にあり、古くから続いた農家です。

黒川 師範を卒業されたのは昭和22年ですね。すると入学されたのは、昭和何年ですか。

神保 昭和19年です。その年の3月に県立小田原中学を卒業して、神奈川師範に入学したのです。

黒川 中学を卒業して入学したというと、先生は2部生ですか。

神保 いや2部ではありません。私の入学した前年の昭和18年に師範学校は官立の神奈川師範学校になり、その時点で1部・2部の区別は無くなりました。

黒川 その辺がちょっと分かりにくいのですが、昨年友松会の理事会でも「神奈川県師範学校」と「神奈川師範学校」と、どう違うのかという質問が出ました。

神保 制度の替わり目にはいろいろな変化があります。当時の人には常識だったことが、時間が経つと分からなくなるのですね。「神奈川県師範学校」と「神奈川師範学校」とどう違うのかなども、その一つです。

黒川 「県」という一字が、入るか入らないかの違いだけのように思いますが。

神保 確かに一字の違いなのですが、「神奈川県師範学校」の方は神奈川県が設立した学校で、つまり「県立」です。それに対して「神奈川師範学校」の方は当時の言葉で言うと「官立」つまり文部省直轄の学校です。それだけでなく「県師範学校」の時代に



神奈川師範学校本館（鎌倉雪の下）

は一部生は高等小学校2年卒で入学しましたが、官立の「神奈川師範学校」は中等学校4年修了以上を入学資格とする専門学校でした。だから制度上は二部生は無くなったのです。

黒川 私は昭和31年に国大に入学したのですが、その頃でも「一部」とか「二部」とかいう言葉は残っていました。意味は良く分かりませんでした。

神保 県立とか官立とかいっても、元来は同じ学校ですから言葉は残ったのでしょね。それに私達の学年には神奈川県師範学校から進学してきた者もいましたので、それらの人はつまり一部生だったのでしょうか。校内には県師範学校時代の生徒でまだ専門学校に入学する年齢に達しない者もいて、その人達は「予科生」と呼ばれました。それに対して私達のような専門学校の学生は「本科生」と言いました。予科生は1年から3年までいましたよ。



神奈川師範1年の頃、友人と。
戦闘帽にカーキ色の服の時代

黒川 なるほど、予科とか本科というのは何なのかと思ったら、そういうことなのですね。それで、その時に入学した1年生は何クラスありましたか。

神保 1組から6組までの六クラスありました。私は1年5組でした。

黒川 横浜の白石さんや六鹿さんも、この時に入学したのですね。

神保 そうです。彼等もこの時の1年生です。

黒川 先生達が入学された昭和19年というと、6月に米軍がサイパン島に上陸を開始しました。7月初めにはサイパンが陥落し、その責任をとって東條内閣が総辞職します。私も国民学校の児童として経験した「学童疎開」も夏には始まりました。そう言う情勢ですから、とても落ち着いて勉強出来る時代ではなかったように思うのですが。



工場に動員された仲間たち

神保 でも4月から6月までの三カ月はちゃんと勉強しました。皆よく勉強したよ。寄宿舎の生活も楽しかったな。一つの部屋に本科の3年生が一人、この人が室長です。あとは2年生が二人、私ともう一人の1年生で二人、その他は予科の1~3年が一人ずつの合計八人です。寄宿舎では掃除・洗濯はみっちりやらされた。でも楽しかったね。

黒川 「4月から6月までの三カ月はちゃんと勉強した」と言うと、7月からはどうなったのですか。

神保 7月からは勤労働員が始まりました。7月は何処へ行ったかな。ちょっと忘れてしまったが8月は私達5組6組は厚木の飛行場の近くの国民学校の講堂(体育館)に布団を持ち込んで泊まり込み、飛行場の穴掘りをしました。

黒川 飛行場の穴って何なのですか。

神保 飛行場の排水溝なのですね。直径9m深さ3mの穴をスコップで掘るのです。その作業は8月いっぱい終わって、9月には学校に戻りました。

黒川 では9月には授業が再開されたのですか。

神保 再開されましたが、普通の授業とちょっと違って主に自分の専攻コースの勉強をしました。

黒川 先生の専攻は理科ですか。

神保 そうです。だから物理とか化学とか生物を中心に学習しました。物理は脇田さん、植物は永海さん、動物は酒井カニさんなどの指導を受けました。それ以外では心理学の塩川さん、国語の吉原さん、数学の井上さんに教わりました。井上さんは小田原の人で東京の物理学校を出てから、どこかの大学に行った人です。あと音楽の月岡さんですね。

黒川 専攻以外の国語とか音楽なども勉強したのですか。

神保 一応やりましたよ。でも学習の中心は自分の専攻に関連する科目です。何故かと言うと、学生の動員は各組単位で行われ、各組の担任の先生も学生に付き添って動員先に行き、学校にはいません。そういう訳で不在の教官が多いから正常な授業が出来ないのです。私達は9月に学校に帰ってきましたが、川崎の工場に行った組の連中は帰ってこない。従って付き添いの先生達も帰ってこない。だからその先生の授業はないのです。



中央の襷を掛けた3年生が陸軍特別甲種幹部候補生として入隊する際の同室の学友との記念撮影。

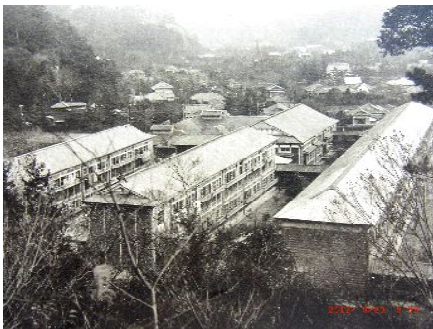
後列右から三人目が神保さん。(昭和19年9月)

黒川 それでは動員の後で学校に戻っても、各自が自習しているようなものですね。

神保 私達の組は9月に学校に帰ってきて1カ月勉強したのですが、10月には高座郡の小学校に泊まり込んで高射砲の陣地を作りました。それから11月には秦野の農家に稲刈りの手伝いに行きました。

黒川 農家の経験のない学生さんは、大変だったでしょう。

神保 三人くらいの学生で組を作って農家に分宿して農作業を手伝うのですが、都会出身の学生は鎌など持ったことも無いから大変だったらしい。私は家が農家だから農作業は得意でしたが。



神奈川師範寄宿舎(昭和10年頃)

黒川 動員や作業を終わって寄宿舎に帰ってくると、寄宿舎で食事をするのですが、その頃食料などはちゃんとあったのですか。

神保 寄宿舎のその頃の食事は酷いもので、ちゃんとした米の飯などはなくて雑炊でしたよ。だから腹が減ってたまらない。私の家は農家だから日曜日に家に帰ると、寄宿舎に戻る時には握り飯を作って貰って、同じ部屋の仲間達に持って帰るのです。部屋に戻るとみんな握り飯を楽しみに待っていた。今になってみれば、あれは良い思い出です。

黒川 11月の秦野の稲刈りの後は、ちゃんと勉強出来たのですか。

神保 いや、昭和19年の12月になったら、6組と私達の5組は藤沢にある東京螺子という工場に動員されました。寄宿舎から自分の布団を持っていき、向こうの寮に泊まり込んでそこから工場に通ったのです。そこでは機関砲の弾を作りました。



寄宿舎食堂での食事(昭和10年頃)

黒川 それはどんな作業をしたのですか。

神保 高温の炉へ鉄の棒を入れて熱します。2,000 度くらいに熱せられて白く輝くようになったら炉から出し、熱せられて軟らかくなった鉄棒をルーラーに通して圧延します。何しろ熱した鉄棒を扱うから冬でも暑い。他の工程の者は「暖かくていいな」と羨ましがりましたが、夏は暑くて大変でした。

作業は大変だったけれど、食堂で食べる食事が実にうまかった。軍需工場だから食料の割



軍需工場での勤労働員

り当てがあり、物資が豊かだったんだね。食堂の配膳をする主任さんはその工場の工場長の娘ですごい美人でね。私達師範の学生にはとても親切にしてくれました。そう言えば女子師範や横浜高女の生徒、それから他の県からの女学生もいたなあ。

黒川 これは師範の女子部から工場動員に行った人に聞いたのですが、その工場にも男子と女子の学生や生徒が動員で来ていて、夕食の後に近くの河原で一緒に合唱をして楽しかったということです。戦時下の厳

しい時代にも、そういう情感あふれる話があったのですね。

神保 この工場での動員がずっと続いていたのですが、20年の6月に作業中に怪我をして病院に担ぎ込まれました。そしてそのまま入院と言う事になったのです。

黒川 そうすると、先生は20年の8月15日には、入院中だったのですか。

神保 いや、その時にはもう退院して、自宅で療養していました。

黒川 8月15日に玉音放送があったのですが、神保さんはこの玉音放送を聞きましたか。ラジオの雑音が多くて、あまりはっきりとは聞き取れなかったという人も多いのですが。

神保 それははっきり聞き取れました。当時は村の中でラジオのある家は私のところを含めて三軒しかありませんでした。だから8月15日の正午には村の人たちが20人くらい私の家に集まって玉音放送を聞きました。その集まった人達は、私以外はみんな女の人なのです。何故なら若くて屈強な男は兵隊に取られていないし、兵隊以外でも工場動員などで男はいません。その女性達が集まって玉音放送を聞いたのです。放送が終わると私の母が「日本は負けた。戦争は終わった。」と叫びました。その場に集まっていた女の人達は、戦争が終わって戦地にいった旦那さんや子ども達が帰ってくると思って、みな嬉しそうでした。



相模湾に集結した連合艦隊(S.20.8.27)

(講談社刊・日録20世紀より転載)

黒川 それで分かりましたが、玉音放送がぼんやりして良く聞き取れなかったというのは、大勢の人が集まって一台のラジオで放送を聞いたからなのです。少ない人数で聞けば良く分かったのでしょう。それにしても玉音放送を聞いた人の反応を、しかも庶民の反応をこんなにはっきり聞いたのは初めてです。大げさに言えばこれは歴史的証言ですね。

この証言を聞いて思うのは、男と女となんて違うのだらうと言う事です。玉音放送を聞いた男の反応は、茫然自失・悲憤慷慨・切齒扼腕という漢語的表現で表わされるもので、しかし内心ホッとした所もある、だがそれは人前では出さない、あるいは出せない、と言っ

たところでしょう。ある意味では、こんな場合に女性がそれほど率直に感情表現できるのは羨ましくもあります。女性は本来的に天動説だなあと改めて思うのですが、でも男と女のこの在り方の違いは、本来身に備わったものでどちらが良いとか悪いとか言うものではないでしょう。

それで話を元に戻すと、戦争が終わったのですから、もちろん工場動員も解除になったのでしょう。



玉音放送を聞く人々(昭和20年8月15日)

(講談社刊・日録20世紀より転載)

神 保 私は家にいたので分かりませんでした。見舞いに来てくれた友人が教えてくれました。みな動員解除で、自分の布団を持って自宅に帰ったそうです。工場動員は解除されたのですが、学校がすぐ始まったのではなく9月いっぱい自宅待機で、学校が始まったのは10月1日からでした。

黒 川 おそらく師範の先生方も体勢を立て直して学生に対するには、一カ月くらいの時間が必要だったのでしょね。学校の様子で敗戦の前後で顕著に変わったことと言うとどんなことでしょう。もちろん配属将校などは居なくなりましたが。

神 保 配属将校はいなくなりましたが、いちばん大きな違いは寄宿舍に入らず、自宅から弁当を持って通ったことです。

黒 川 それはやっぱり寄宿舍で食事を出すのが難しかったからですかね。

神 保 多分そうでしょう、なにしろ食糧難ですから。私も弁当をよく盗まれました。

黒 川 神保さんのところは農家だから、もちろんお米の弁当でしょう。白米の弁当なんて、当時は貴重品ですからね。

神 保 そうですね。でも初めはそんなこととは思わないから、平気でその辺に置いておく訳です。すると食べられて無くなってしまふ。

黒 川 将来先生になろうとする者が、人の弁当を盗み食いして良いのかと思います。当時の食糧難は酷かったですからね。

神 保 それからは親しい友人の為に、母親が握り飯を幾つも作って持たせてくれました。なかに梅干しを入れてね。梅干しも自家製です。この時、一緒に握り飯を食べた友人はほとんどもう亡くなりました。横浜の齋藤というのはまだ元気ですが。齋藤は勉強が良く出来たから、握り飯のお礼に私分からない所を教えてくださいましたよ。だけどあの時代は勉強を良くしたなあ。本も良く読んだ。

黒 川 あの時代は娯楽といったらラジオと映画があるくらいで、本を読むことが一種の娯楽でしたからね。小学生も図書館などないから、友人の本を借りて読むのですが、借りる順番を取るのが大変でした。ところで10月から学校が始まって、どんな勉強をしたのですか。

神 保 私の場合は理科専攻だから、物理・化学・生物・地学など自然科学系統の勉強をしました。国語などは全然やらなかったな。

黒 川 自然科学は、戦中も戦後も内容に変わりはありませんからね。修身などは無くなっていた



国会議事堂の前庭で畑を耕し、食糧を作った。(昭和20年9月)

でしょうが、歴史もやりませんでしたか。

神 保 やりませんでしたね。

黒 川 神保さんはその後、約1年半後の昭和22年3月に師範学校を卒業されるのですが、教育実習はいつ行かれたのですか。

神 保 昭和22年の1月に附属で実習をやり、2月に鎌倉の第二小で地方実習をやりました。

黒 川 卒業直前の時期ですね。実習は普通はもっと早くやるでしょう。

神 保 普通なら教育実習はもっと早くやるのですが、なにしろ戦争が終わるまでは工場動員で忙しく、戦争が終わっても授業が再開したのは20年の10月で、翌年21年は最後の学年ですから勉強の遅れを取り戻すのが大変だったのでしょう。だから実習も遅くなったのだと思います。

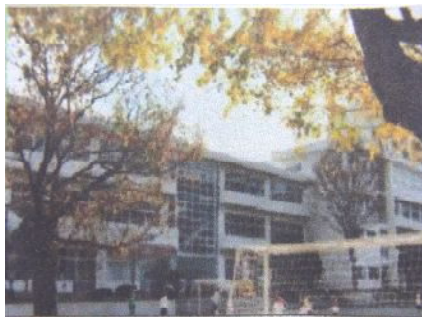
黒 川 卒業されて最初に赴任したのは、小田原の学校ですか。

神 保 今では小田原市に入っていますが、当時は足柄下郡でした。国府津の近くの前羽村立前羽小学校の訓導になりました。当時は小学校の教師は「教諭」と言わずに「訓導」と言ったのです。



黒 川 今日拝見した神保さんの履歴書の「職歴」の欄をみて不思議に思ったのですが、前羽小学校訓導だったのは4月30日までで、5月1日には小舟中学校教諭になっていますね。わずか1カ月で勤務校が変わったのは何故ですか。

神 保 昭和22年は戦後の学制改革、いわゆる六三制が発足した年でした。なにしろ大改革が慌ただしく行われたので、その余波が人事面にも表れたのです。義務教育を3年延長して新制中学を作ったのですが、生徒の数に見合う教員をそろえるのが大変で、新しく任命された新制中学の校長さん達は苦勞されたようです。私も師範の先輩である中学の校長さんに頼まれて、小学校から中学に異動しました。新制中学の開校が5月1日でしたから、それに合わせて1カ月で異動したのです。こういう非常の場合でなければ、在任1カ月で異動なんて考えられませんね。



上の写真は2枚とも現在の前羽小。校地のすぐそばに海があるのが分かる。

黒 川 実は私は新制中学の1期生なのですが、そう言えば入学式は5月5日でした。

神 保 5月に赴任した中学の正式な校名が、神奈川県足柄下郡学校組合立小舟中学校と言うのです。

黒 川 ちょっと珍しい校名ですね。その「学校組合立」というのは何ですか。

神 保 当時の村は小さな自治体ですから、小学校くらいは自力で維持出来ても、その上の中学校となると設備もいるし、一つの村だけでは設立して維持するのは無理なのです。そこで、足柄下郡の幾つかの町村が協力して教育の事業をする、その為の組合を作ったのです。

黒 川 そう言えば、消防の組合のことは聞いたことがありますね。

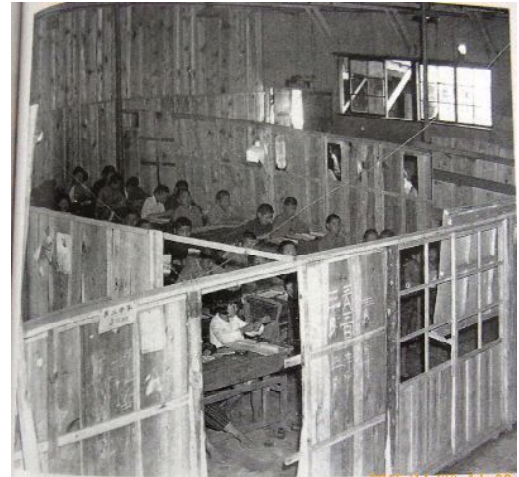
神 保 私が最初に勤務した前羽小学校と隣の下中小学校の卒業生を集めて、この小舟中学校を作りました。なにしろ戦後すぐの時代で物資が不足している時代ですから、教科書も最初の

年は1枚の大きな紙に教科書の内容が何ページか印刷されていて、それをハサミで切って自分で綴じるのです。

黒川 ああ、思い出しました。その大きな1枚の紙に印刷された教科書、私達も使いましたよ。教科書だけでなくあらゆるものが学校に無くて、先生が「金槌やノコギリ、箒やバケツ、釘や雑巾など何でもよいから君達の家にあるものを、学校に持ってきて下さい。」と生徒に頼んでいました。私達の小学校の学区は、横浜では珍しくあまり戦災に遭わなかったので、家庭にそういうものがあつたのです。

神保 いろいろな道具どころか中学の校舎さえ無いのですからね。この小舟中学校は、私が最初に勤務した前羽小と隣の下中小の二校の6年卒業生と高等科1年・2年生が一緒になって出来た学校です。つまり6年を卒業した者全員が中学1年になり、高等科1,2年生が中学の2,3年生になったのです。

黒川 私などは小学校の尋常科・高等科などと言う言葉を知っている最後の世代でしょう。尋常科は6年で、高等科は2年でしたね。尋常科は義務教育で全員が通う、高等科は義務制でないので人数はずっと少なかったですね。



新制中学の教室不足は深刻だった。写真は廃工場の建物を利用した教室。(昭和23年、東京都大田区)

神保 昔は義務教育の6年間だけ小学校に通って、あとは家業を継いだり奉公に出たり、職人に弟子入りしたりする者が大多数でした。村でもごく恵まれた家の子どもが旧制中学や高女に進学し、その次くらいの子が高等科に進みました。だから高等科の生徒は少なく、その少ない生徒がなった新制中学の2,3年生も、1年生に比べて少なかったのです。

黒川 私の卒業した小学校は高等科が無かったので、新制中学では我々1年生しかおらず、3年間ずっと最上級生で良かったです。

神保 私の勤務した中学では、そんなわけで1年生に比べて2,3年生の人数が少ないのです。そこで人数の多い1年生は下中小学校の教室を借り、人数の少ない2,3年生は前羽小学校の近くの場所にトタン板で急造の校舎を作り、そこで学習しました。本当に粗末な校舎で、校舎の中は床板も無い土間のままで、そこに何人も並んで座れるような細長い木の腰かけと、細長い机が置いてありました。六三制の始まりは、どこでもそんな様子だったのです。でもそんな環境でも、子ども達は頑張ってよく勉強しました。

黒川 そう、物質的なものは貧しかったけれど、社会全体が明るく活気がありました。戦争は終わった、これからは日本も良くなるという明るい空気が、社会全体にありましたね。

神保 この時代で懐かしく思い出すのは、ナブラ騒動です。

黒川 えっ何ですか、そのナブラというのは。

神保 この時代には相模湾でもブリがたくさん獲れました。そのブリの大群がエサのイワシを追うのです。追われたイワシは逃げ場を失って岸の方に盛り上がるように押し寄せる。それがナブラです。校舎は海岸のそばに建っているから窓からナブラが見えるのです。それを見た子ども達は「ナブラだ」と叫んで、授業中でも教室から飛び出す。カバンの代わりに教科書などを包んできた風呂敷をもって浜辺へ一目散、ブリに追われて逃げまどい浜に打

ち上げられたイワシを手づかみで風呂敷に入れる。それを今日の獲物として家に持って帰るのです。なにしろ食糧難の時代ですから、イワシを風呂敷一杯持って帰れば母親に褒められるのです。あの頃はブリもたくさん獲れ、この近くの浜でもそんなことがよく起こっていたのですね。今では考えられないような懐かしい思い出です。



岡野中時代、卒業式の後で卒業生と

黒川 まるで神代の事のように。それが数十年前にはこの辺で
実際あったのですね。

神保 この小舟中学校には、昭和27年3月末まで勤務しましたが、創立された翌年の昭和23年には、足柄下郡下中村前羽村学校組合立橋中学校と校名が変わりました。戦後の激動の時代ですから、変化も激しかったのですね。この橋中に勤務していた間に、昭和26年4月から27年3月末まで、東京教育大学科学教育研究室へ研修に行きました。そして27年4月には、横浜市立岡野中学校に異動しました。

黒川 足柄下郡から横浜市への転任は、何か理由があったのですか。

神保 師範の先輩である岡野中の校長さんに、「私の学校に来てくれ」と引っぱられたのです。岡野中での私の学年は11学級で教師は15人ほどいました。その中で師範出の先生は1/3ほどしかいませんでした。校長さんが私を呼んだのも、そんな事情があったからでしょう。

黒川 岡野中学というのは戦中までは、岡野小学校でしたね。

神保 岡野小時代に空襲に遭って校舎が焼けたのですね。それで窓枠が焦げてグラグラになっている。だから危ないから窓には触ってはいけないと言われました。触ると下に落ちる危険があると言うのですね。それほど酷い校舎でした。

黒川 その後も岡野中に勤務しながら、東京工大や東大の教育心理学教室に研修に行っておられますが、神保さんの職歴を拝見すると昭和32年4月に足柄下郡に戻っておられますね。



横浜国大岩実験所のある、真鶴町岩の海岸

神保 そうです。昭和32年の4月1日付で横浜国大岩実験所の助手を命ぜられ、同時に任地外教員として真鶴町岩小学校勤務を命じられました。

黒川 真鶴の岩実験所というと、生物関係の学生がよく実習に行くところですね。その助手を命じられたというのは、なにか理由があるのですか。

神保 国大の酒井先生(カニさん)の推薦と言うか命令というか、まあそんな所です。なにしろ酒井さんは私にとっては、小田原中学と神奈川師範と両方の先輩だからね。

黒川 なるほどそうなのですか。それは分かりましたが、「同時に・・・」と書いてある「任地外教員」とはいったいどんなものなのですか。ふだんは岩実験所に勤務して、岩小学校には時どき行くと言うことなのですか。

神保 いや反対で、ふだんは岩小学校に勤務して岩実験所が忙しくなると実験所に手伝いに行く

ということなのです。給料は岩村から貰っていますから。

黒川 何かわかりにくいのですが、何でそんな辞令が出たのですか。

神保 それは岩実験所の助手の給料が、お話しにならないほど安かったからなのです。その給料ではとても生活できないので、何とかしてやろうということで、こういう辞令が出たのだと思います。



湯河原町 遠望

黒川 その岩実験所助手と岩小学校勤務の仕事を四年ほどやってから、湯河原中学校に異動されたのですね。

神保 私が湯河原中学校に異動したのは昭和 36 年ですが、その 6 年前の昭和 30 年に旧湯河原町と吉浜町、福浦村の二町一村が合併して新湯河原町が出来ました。そして私が異動した年の 36 年に、湯河原中学校と吉浜中学校が合併して新湯河原中学校になったのです。私がその新しい湯河原中学校に赴任すると、当時の教育長が「神保さん、貴方が欲しいと思う理想の理科室を設計して下さい。」と言うのです。

黒川 では神保さんが異動したのは、その理想の理科室を作るためだったという感じですね。

神保 教育長さんがそう言ってくれるのだからと思って、私もそれならと思い切って物理教室・化学教室・生物教室・地学教室と、慾ばって希望を出したら何とそれが出来てしまったのです。

黒川 えっ、凄いですね。高校でもそれだけの設備は無いでしょう。

神保 そのほかにプラネタリウムもありました。理科準備室も普通の教室くらいの大きさがありましたよ。

黒川 もしかしたら当時は温泉ブームで、湯河原町の財政が豊かだったのでしょうか。それだけ立派な設備が有って理科の先生は何人いたのですか。



現在の湯河原中学校

神保 私を入れて 5 人です。動物・植物・物理・化学・地学(天文学)と、専門の人が揃っていました。

師範や国大を出たのは 2 人だけだったが、みんな有能な勉強家でしたよ。そんな素晴らしい設備があるものだから全国から先生方が参観に見えて、研究授業や研究会をやりました。あの頃は楽しかったなあ。

黒川 神保先生はその後、全国公立中学校理科教育研究会理事や神奈川県公立中学校理科研究会副会長、西湘科学振興委員会理事長などの役職を勤められ、定年で退職された後も元気に活動されておられるようで、そのお元気なことには驚かされます。名刺を拝見すると県や湘南の日中友好協会の活動もなさっているようですね。

神保 そうです。毎年、中国東北地方の瀋陽と南の雲南省とに出かけています。

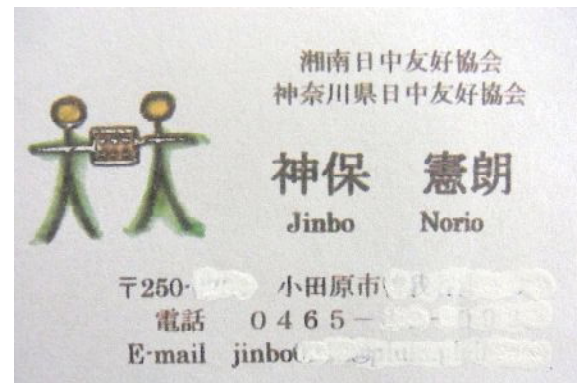
黒川 毎年お出かけになると言う事は、その二つの場所に何か出かける理由が有るのですか。

神保 瀋陽は神奈川県と姉妹都市の関係にあり、日本企業も多く進出しています。その日本企業に就職を希望する学生に入社試験を行うのですが、その際に日本語が出来る方が試験に有利です。そこで毎年 10 月に高校生を対象とした日本語弁論大会を開き、入賞者に賞状と

賞品を渡すのですが、入賞者の中で上位5人を毎年神奈川県に招待します。

雲南省は中国国歌の作曲者聶耳(ニエアル)の故郷です。聶耳は戦前に国民政府の弾圧を逃れて日本に来たのですが、1935年(昭和10)に藤沢の鵠沼海岸で遊泳中に事故で亡くなりました。その慰霊碑を私達の仲間が事故の現場に建立したのですが、その因縁で毎年命日の7月17日に雲南省にある聶耳の出身地昆明に招待されて出かけるのです。毎年そこでも現地の中日友好協会の主催で大学生の弁論大会が開かれ、1~3位の学生を神奈川県に招待します。

黒川 間もなく卒寿という御年にはとても見えない元気さで、軽トラを運転して農作業をなさっているようですが、その元気をいつまでも持ち続けて下さるようお願いいたします。本日は長時間にわたって戦中・戦後の時代の貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。それでは本日の対談は、これで終わらせて頂きます。



あとがき (H.27.12.1 黒川記)

この項の初めに書いたように、神保憲朗さんと初めてお会いしたのは今年の9月11日、小田原・足柄下支部の懇親会の時でした。その時、神保さんが昭和22年師範卒と知ったのです。この22年、23年卒業の方々は、私達の学年が新制中学に入学した時の恩師に当たる年配です。「友松対談」などでいろいろな同窓生に話を聞くなかで、私は自分が経験した戦争末期や戦後の学制改革のことを体験者に是非聞いてみたいと思いました。ただ残念なことにこの年代の方は多くは鬼籍に入られ、そうでない方でも記憶が曖昧になっていることが多いのです。ですから、恩師の年代の方に話を聞くことは諦めていました。ところが神保さんに会って、もしかしたら聞けるかもという希望が湧いてきました。対談の結果は期



待した通り70年も昔のことを、よく御記憶でした。戦中の学徒動員の実態や戦中戦後の師範の様子、戦後の六三制実施の時期の様子など、多くの貴重な証言が得られたと思います。特に玉音放送を聞いた時の庶民の主婦たちの反応は、初めて聞いたことでした。

本年度の「友松対談」はこれで終わります。誰かがこの企画を引き継いでくれると良いのですが。